Meisei University

ポートフォリオ作成によるリーディングの指導

――一般教育英語をより魅力あるものに――

深　澤　　清*

はじめに

最近の大学生は英語読解能力が低下し、論理的にものごとを考えられないという批判を耳にすることが多くなった。「戦後の英語教育があまりにも実用英語と称するものに偏ってきたことに原因の一端がある」[1]とする意見もあるが、それは英語に限らず日本語においてもあてはまると思われる。戦後の英語教育は実用的な英語を身につけさせることに重点が置かれ、近年では「オーラル・コミュニケーション」が英語の教授法として賞賛されてきた。一方、そのしわ寄せとして、学生はじっくり腰をすえて英文を読む習慣が少なくなっている。また、大胆な言い方が許されるなら、オーラル・コミュニケーションにしても、それは「サバイバル・イングリッシュ」と捉えられてもしかたがない面があり、まさにバブル（泡）のごとくしゃべるだけで消えてしまい、後には何も残らないことが多い。何かを伝えるためには、こちら側に「伝えるもの」が存在しなければ成立せず、伝えるものを蓄積するためには、生活環境や自国の歴史・文化などに日頃から関心を持ち、学習しておかなければならない。つまり、コミュニケーションを図るには、話す行為以上に「話すための材料」を蓄積することが大切であり、自己鍛錬が求められると言っても過言ではない。

大学の一般教養の英語、特に「英文購読」の授業は、担当教師の方針によって様々な展開が可能だが、「話すための材料」を学生が収集するためには、教師はどのような授業環境を提供すればいいのであろうか。

本稿は平成12年4月から平成13年3月まで担当した英文購読のクラス（経営情報学部2年生48名）で実践した研究報告である。その内容は年度初めに教師が選定したテキストを読むという従来の一斉授業方式を改め、学生が主体的に素材を収集・編集したものをCD-ROMに保存し、年度末に「英語テキスト」として配布するという、これまでの逆方式である。図式的には簡単に思えるが、クラス単位で実践すると予想を越えた難しさがあった。英語教育には学問的な論理体系も必要であるが、理論ばかりで実践が伴わないという批判も聞かれる。本稿に対する様々なご意見をいただき、「一般教育の英語授業」をより充実したものにするための参考とさせていただきたい。

英語教科書の問題点

大学入学後、学生が受講する一般教養科目の「英文購読（リーディング）」については、

＊　一般教育　助教授　英語

NII-Electronic Library Service

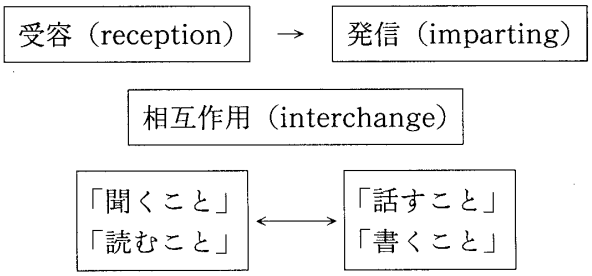
Meisei University

すでに本学紀要第8号所載の筆者拙稿で報告したが、調査結果から得られた一般的な授業の流れは以下の通りである。教師はシラバスに基づいてテキストを選定するが、通常は市販された教科書の中から目的にかなうものを選ぶ。(又はテキストを選定した後、シラバスをつくる。)学生は授業の前に予習をして未知なる単語の意味を調べ、日本語訳を試みる。ある場合には前の時間に自分の担当箇所が教師から指定され、次の授業ではノートに書いてきた日本語訳を朗読する。教師は修正箇所や重要構文を確認したり、テキストの内容に関連した自分の意見や、学生の将来の指針となる話を添えたりする。最後には模範的な日本語訳を学生に伝え、学生は模範訳をノートにとることに集中する。なぜなら定期試験では、英文の和訳が出題される場合がほとんどだからである。調査した学生のおよそ86%が、リーディングの授業はこのような流れであると回答した。

上記の授業展開の問題点としては和訳が中心になり、テキストの内容について学生間の意見交換や、その後の派生的な活動がしにくいことがあげられる。ただし、語学のスキルアップが目的ではなく、教師の人生哲学などを通して、学生の将来への指針や人間教育を目的とするならば、それなりの目標も達成できるかもしれない。しかしこの場合、学生が教師の話に対して関心を持ち、教師と学生のコミュニケーションが十分とれているのか検討する余地がある。なぜなら、学生への調査結果からもわかるように、場合によっては教師の自己満足に終わり、学生はただ沈黙を守り教師の話に耳を傾けていることもあるからだ。このように考えると、「英文購読」の定義そのものから再検討する必要があり、これをどのようにとらえるかで、教授法も違ったものになるはずである。ここでは、コミュニケーションのための英文購読という観点から述べるつもりである。

語学学習におけるコミュニケーション

語学学習の観点からみれば、英語は音声言語と文字言語からなり、四技能の面からみれば、前者は「聞く・話す」となり、後者は「読む・書く」と置き換えることができる。幼児の語彙獲得研究からもわかるように、語彙を発するためにはその数倍の量を耳から入れておく必要があり、受容(reception)と発信(imparting)の間には相互作用(interchange)がなければならない。説明のために以下に単純なモデルを示すが、実際の学習では様々な要素が総合的に作用する。



この図式からもわかるように、英文のリーディングで期待される能力とは、単に英文に親しみ、文章の内容を理解することだけではない。その活動が充実すれば、いずれ何らかのメッセージを発信するために「書くこと」や「話すこと」につながるはずである。つまり、英文をディーコード(decode)する訓練は、英文をクリエート(create)する準備であると

NII-Electronic Library Service

Meisei University

もいえる。そのためには「書くこと」の数倍の時間を「読むこと」に費やす必要があり、学習をできるだけ継続させることが求められる。学習を継続させるという意味では、洋書のコースブックを除く市販のリーディング用テキストは、必ずしも学生にとって魅力があるとはいえない。視覚的なカラー写真や図式が少なく、また、臨場感を高める音声テープ等もついていない場合がほとんどである。購入させるにはあまりにも高額であり、学生にそれを強いるわけにはいかない。言うまでもなく、授業用テープのダビングは著作権法に抵触するので、教育のためとはいえ安易に行うことはできない。教科書という閉ざされた空間から学生を解放し、多角的にリーディングを展開するための道具としては、やはりインターネットを使ったリーディングの授業は効果的である。

情報収集活動

大学一般教養で英語を担当する教師は、週あたりの講義回数が限定されるため、学生と連絡をとり合うことが難しい。しかし、メーリングリストなどのネットワークを利用すれば、お互いに連絡をとることができ、講義時間を有効に活用することができる。ネットワークの利用方法については拙稿の中で報告した通りであるが、再度その利便性について主に3つの点を強調しておきたい。

(1)　Web 上に練習問題を載せる

担当する講義時間以外でも、学生は教師のホームページに作成された文法練習問題、TOEIC や TOEFL などの資格試験問題を一日の授業の空き時間、および授業開始前の短い時間を利用して解き、リーディングに必要な構文や単語力を身につけていく。それぞれのセクションは正解率が自動的に表示されるので、学習者は自分の達成度を確認することができる。定期試験では教師は学生が自主的に勉強した範囲からも出題し、学習の定着度をみることが可能である。

(2)　リーディングに対して積極性が生まれる

情報検索による英文読解は、これまでの「英語を学ぶ」という感覚から「英語を使って何かをする」というものに変わり、積極性がみられるようになる。従来ありがちな教師が指定した一文を和訳できるかというよりも、ページを作成した人物が読者に何を訴えたいのか、また何を伝えたいのかなど、メッセージをとらえることに焦点があてられ、それが学生の内的動機付け（Intrinsic motivation）へとつながっていく。また、長文に対する嫌悪感は軽減され、各段落のトピックセンテンスを見つけ出すことで、全体的な意味を把握しようとする学生の努力がみられる。

(3)　教師・学生間の情報交換が盛んになる

教員のホームページ上にある掲示板や、クラスのメーリングリストを利用することで、授業以外でも教師と学生は情報交換をすることができる。メーリングリストに投稿されたものは自動的にクラス全員に配信されるので、他の学生が書いたレポートなども読むことができ、お互いに刺激し合いながら学習することが可能である。また、教師は学生への連絡以外に、

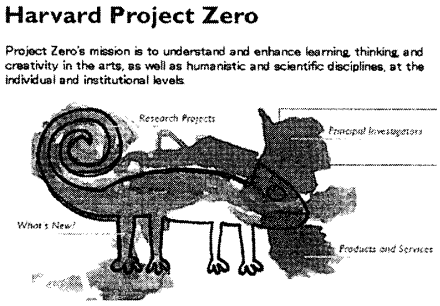
NII-Electronic Library Service

Meisei University

定期的に「5分間英語」と題して英文法、時事英語、資格試験対策問題などを配信する。

このように、ネットワークを利用した指導は、市販の英文テキストを用いる場合よりも学生間により自主的な活動が生まれ、授業に対する関心も深まった。この活動が軌道に乗れば、いずれは教師の手を放れ、「教師主導型」から「学生自立型」のリーディングに移行するはずである。ただし留意すべき点は、自立といっても個々の学生がその場の思いつきで、ただ読み進めればいいというわけではない。教師は学生が何らかのテーマに沿って読み進められるように指導すべきであるが、それを可能にするような授業環境やシステムづくりが求められる。その方法の一つが、次に示すような「ポートフォリオ評価」である。

ポートフォリオ評価



ポートフォリオ（portfolio）とは、元来、写真家やデザイナー、イラストレーター、ジャーナリストなどが、これまで自分が手がけた業績を顧客に見せるためにファイリングしたものである。そのファイルにはこれまでの仕事ぶりや業績が示され、人物の価値観や表現力が示される。教育界での「ポートフォリオ評価」とは、ペーパーテストのような学習の「結果」を評価するのではなく、ある学習領域での生徒の努力や進歩、目標を達成するまでの「過程」を重視する評価である。それは「学習ファイルによる評価」とも言えるであろう。ハーバード大学のハワード・ガードナー（Howard Gardner）が唱えた「multiple intelligence（多元的知性）」とは、子どもの知能や知性は、言語的なものや論理的なものからだけでなく、芸術的なセンスや身体的な表現、そして人との関わりなどからも得られるというものである[2)]。つまり、試験（テスト）中心の教育に対して、「リアリティーがあり、子どもにとって意味のある学び」の方が大切ではないかという主張である。子どもの持つ多元的な知性を伸ばすために、ガードナーを中心としたハーバード大学の研究者や教育現場の教師たちは様々なプロジェクトを推進しているが、その理論と実践は「プロジェクト・ゼロ」として公開されている。日本の小学校でも「総合的な学習の時間」が導入されるが、learning community と呼ばれる「学びの場」を与えることは、学生の自立性を高める意味で効果的である。

さて、このポートフォリオの考えを英文購読の授業にも応用したが、それはPCのハードディスクをいわゆるポートフォリオとみなし、その中に英文の要旨を書き込んだり、画像を貼付していくというものである。成績評価といえば定期試験を思い浮かべるが、このポートフォリオ評価では「進行しながら（on going）の評価」が可能であり、個々の学生の「学び」をサポートすることができる。その場の思いつきで情報を収集しただけでは単なる「学習ファイル」になるが、ある目的のもとに選び編集していけば、それはまとまりのある「ポートフォリオ」になる。教師主導ではなく学生が主体的に英文を読み、英語や日本語でその要旨をまとめたり、画像をコピーしてファイルに加えれば、いずれ立派なポートフォリオが作成されるはずである。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

ポートフォリオ作成

インターネットを使ったリーディングの授業において、学生はコンピュータ操作に慣れるだけでなく、膨大な情報を迅速に処理する「処理能力」も高めていかなければならない。いわゆる文部科学省が提唱する「情報活用能力の育成」というものである。前期の授業ではこの点を考慮し、学生は教員のホームページを「ホームグラウンド」として活動し、後期の「巣立ちの時期」まで演習を繰り返した。学生は教師が指定したウェブサイトにアクセスして英文のスキミングやスキャニングを行い、英文の要旨を掲示板やメーリングリストに投稿する。そして学生間で情報交換を繰り返しながら、短時間でまとまりのある文章を書くようになっていく。さらに、学生にとって大切な「調べて書く」という習慣が身につき、大量の英文を読む必要に迫られても拒否反応を示すことはなくなった。新学期において多くの学生は、「英文読解」の授業は単に和訳だけがその目的であると誤解しており、単純な「和訳作業」の過程で英語嫌いを生み出していることが調査結果からうかがえる。学生へのアンケート調査では、「英語は好きだが、辞書を片手に黙々と和訳するだけの授業は嫌である」とする意見が多かった。このような機械的な作業はある段階までは必要だと思うが、それがすべてでは学生が英語嫌いになってもしかたがない。これに対して、インターネットを用いたリーディングの授業は、和訳そのものが目的ではなく、その先にある大きな目標課題が見えるので、学生たちは積極的に英文を読み進めることができた。

後期に入り、クラス全員が同一サイトにアクセスして英文を読む方法から、学生自身が何らかのテーマを持ち、それに基づいて様々なサイトを巡る方法に変えた。つまり、個人のポートフォリオ作成である。初期段階では学生が明確なテーマを持つことが難しいと思われたので、例えば環境問題や健康問題など、何らかのテーマを学生に与えた。

さて、学生は与えられたテーマをどのように解釈してウェブ上のサイトを巡り、資料を収集して自分のポートフォリオに加えたのであろうか。これを検証するためにクラスのある学生の許可を得てその過程を観察し、ポートフォリオ作成に至るまでの経緯を追ってみた。以下は「環境問題に対する人々のとり組み」というテーマを与えられた場合の具体例である。

情報学部２年生　男性（自己申告では英検準２級程度）

1. 教師のホームページにある英和辞典のリンクサイトにアクセスして、「環境」(circumstance) という単語を入力する。その後、この単語から派生する様々な英単語を調べた。cf. pollution（汚染), destruction（破壊), environmental protection（環境保護), recycle（リサイクル）など

2. 表示されたrecycle（リサイクル）という文字からある製品を思いついたのか、Yahooの検索サイトで“rewatch”というキーワードを入力し、腕時計を販売する会社のホームページに入った。そして、腕時計に関する英文の解説を読み始めた。このReWATCHとは、アルミ缶のリサイクル率が87%という世界一の水準を誇るスイスで生まれたもので、その名前の通り、大部分はリサイクル資源から出来ている。ベゼル部分には100トンもの力で圧縮された「コカ・コーラ」や「Heineken」などの空缶一缶分が使われ、バンド部分は自動車のシート、例えばポロのコンパーチブルの帆や、メルセデスベンツのシートの革が主な素

NII-Electronic Library Service

Meisei University

材として使われている[3)]。学生がこの時計に関心を抱いたのは、友人の一人がこの種の時計を持っているからだという。

この会社のホームページには、リウォッチの誕生とその歴史について英文の解説があるが、学生は前期の授業でスキミングやスキャニングを用いた読み方に慣れているので、短時間で英文の概略はつかんだようである。また、本文からの情報だけでなく、例えばボールド書体で書かれている "Past, Present, Future—*A short history of ReWATCH*" などのタイトルや、"The Product and its philosophy"、そして "Synergies for ecologically oriented marketing partners" などの見出しからも、英文の内容を導き出している。学生が会社のホームページからダウンロードした著作権フリーの英文資料は、語数にして1073語であった。それぞれのパラグラフからトピックセンスを抜粋し、自分のファイルに記入した英文の語数が296語。その後、主語を代名詞に変えたり、関係代名詞で文をつなげたりして文字数を減らし、結局ポートフォリオとして保存したのは以下の通り、全体の8パーセントにあたる93語であった。同時に参考となる腕時計の写真もコピーしてファイルに貼付した。

The chronometer made from the recycled aluminum can is a Swiss invention of the year 1993 and was initially sold in specialty stores under the name CRASH. In 1994 the company was acquired by Dieter Meier, who reworked the concept and developed, together with art director Martin Wanner, a watch under the name ReWATCH, the case of which uses not only recycled aluminum cans but also melted down metal scrap from a wide range of industrial applications. ReWATCH is planning to establish a prize for 'individual contributions to protecting the environment'.

1993年にリサイクル缶を再利用して "CRASH" というものが作られたが、この段階では製品として完成されたものではなかった。ここに目をつけたのがスイスの名士、ディータ・マイヤー氏。この "CRASH" にプレス法の技術や、ベゼル部にラッカーを塗って手に怪我をしないような工夫を施し、改良を加えて完成させたのがこのユニークな時計、ReWATCHである。

ポートフォリオに記入された英文をオリジナルのものと比較検討してみると、パラグラフごとにトピックセンテンスを上手に抜き出していることがわかる。挿入語句の削除や、理解できない部分を削除することによって結果的に語数も減り、かえって内容もわかりやすくなっている。また、貼付された腕時計の模様から空き缶のイメージをつかむことができ、視覚的にも英文の内容を補足している。

学生がオリジナルの英文から初めに抜粋した296語に関して、学生はその意味を把握して記録しているのかと問われたならば、その答えはYesでもありNoでもある。つまり、伝統的な出題方法である下線部訳を問う評価基準であれば、訳したものは意味不明な日本語となり、不正解とされてしまうであろう。しかし、学生はこの作業中、英文をいわば「英語の頭」で考えており、日本語を媒介して意味をつかもうとしていない。つまり、学生は日本語

NII-Electronic Library Service

Meisei University

に訳さなくとも、英語で内容を考え、消費者に対する会社からのメッセージをとらえている。また、時計の製造工程、値段表示やデザインなど、貼付された画像も英文の意味理解に役立っている。学生はパラグラフごとのトピックセンテンスをつなぎ合わせ、最後には腕時計を説明する93語の英文に仕上げた。学術的、およびaccuracyを重視する英語教育からすれば、このようなアプローチは問題があるかもしれないが、一般教育の観点から見れば、ポートフォリオ評価は教育的効果が大きいと思われる。

ところで、この会社のホームページにある腕時計の解説文は、教科書を執筆する学者や作家のような、文章の達人によって書かれたとは思われないが、消費者に何かを訴えかける一種の迫力を感じさせる。時には英語表現や文法の誤り、スペルミスが発生するかもしれないが、見方を変えればそれは人々の「生の声」であり、日常生活にはよくあることである。学生がポートフォリオ作成のために抜粋した英文は、「学校英語」と呼ばれる規格通りの教科書の中では、あまり目にする機会はないものである。教科書の文章は何度も推敲され、磨きがかけられているが、その反面、人間味というか生命の息吹が感じられないこともある。そのような印象を持つのは私だけであろうか。商品販売には売る側と買う側の微妙な「かけひき」がある。相手の熱意に負けて思わず「売った」、「買った」となるのが自然である。学生が様々なホームページを目にする時、教科書にはない魅力を感じる理由の一つは、この点にあるのではないだろうか。学生の中にはいずれ企業に就職し、商品開発や販売を担当する者もいるだろうし、外資系の会社で働くこともあるかもしれない。そのように考えると、学生はいわば無菌培養された教科書の英文だけでなく、社会の荒波で揉まれたこのような英文にも、慣れておく必要があると思われる。

発展的な活動へ

次に学生の関心は日本国内にあるReWATCHの輸入業者に移り、Yahooの検索サイトで該当するURLを探した。そこには日本語による腕時計の解説文があり、先ほどの英文を補足する説明も加えられていた。これによると、時計の開発者であるマイヤー氏は、多彩な人物であることがわかる。彼は700万枚のアルバムセールスを誇るテクノグループ「イエロー」のポップアーティストであり、スイスではカリスマ的存在であるという。それ以外にもアルゼンチンで無農薬牧場の経営や映画監督、そしてコラムニストなど、その活動範囲は広い。さらに興味深いのは、彼のリサイクルへのこだわりは音楽表現にも生かされ、ミュージシャンとして作り上げた「THE SOUND OF RECYCLING」は、空き缶などの廃材を楽器として演奏したものであるという。まさに、音までが「リサイクル」である。学生はもともと音楽が好きだったので、廃材を用いた音楽が他にもあるだろうとの推測から、次の検索ではキーワードを“music lover”と入力して、新たな英文サイトへ旅立つ準備にとりかかった。

時計の材料となるアルミ缶は一つずつ圧縮工程を経てベゼルにリサイクルされるが、缶の置き方や向きによって、同じ缶でもまったく違う模様のベゼルができあがる。かつて大量消費時代の中で、同一規格の製品が大量に製造され、人々は同じ商品を持つことで精神的な満足を得ていたこともある。しかし、そこで失われたものは個人のオリジナリティーではなかったか。リウォッチの資料を読む学生の姿を見ていて、ふと「リウォッチは学生そのものではないか」という思いにかられた。すなわち、学生の容姿が異なるように、個人によってア

NII-Electronic Library Service

Meisei University

ウトプット、つまり学習の達成度が異なってもいいのではないかと考えた。同一の時計を作ることが難しいように、すべての学生に同一の教育成果を期待することは難しい。そのように考えると、英文購読の授業で学生が同一の英文テキストを読み、教師の模範訳をノートに記録し、定期テストで丸暗記した日本語訳を解答用紙に書く作業が、はたして教授法として優れたものであるのか、再検討すべきであると思われる。

プレゼンテーション

学生が作成したポートフォリオはサーバーのディスクに保存されているので、教師は画面上でファイルを見ながら学生と語り合い、評価することができる。この場合、「評価」とは「成績をつける」という意味ではなく、英語にあてはめるなら“assessment”という言葉が適切かもしれない。「アセスメント」とは語源的には「横に座る（sit beside)」という意味であるが、教師は学生の自主的な学習を促すため、寄り添いながら支援するというものである。教師は学生のファイルを見れば、これまでどのようなものに関心を持ちプロジェクトを推進してきたのか、あるいはこれからどのようなことをしていくのかなど、様々なことを把握することが可能である。また、学生は教師との話し合いの中で、「今何をしているのか」、「今後どうしたいのか」、そして「そのためにはどのような方法があるか」など、自分自身を客観的に見つめる機会が与えられ、それが問題解決への糸口となる。つまり、「メタ認識能力」が養われるというわけである。学生との対話は、時には人生相談といえるものになり、学生の悩みを相談するカウンセリングの機能も果たすことを強調しておきたい。

さて、学生は授業時間外でも、学内や自宅でインターネットを使いポートフォリオに様々な情報を蓄積していったが、後期授業も終盤にさしかかった12月、ポートフォリオの中で各自が最も気に入ったものをクラス内で発表してもらうことにした。プレゼンテーションをより効果的なものにするために、多くの学生はHTMLファイルに編集してサーバーに送り、自分のホームページにリンクさせた。ホームページを開設していない学生は、ファイルをフロッピーに保存し、発表時に教室前面にある教員用のPCを使用したり、OHPやスクリーンなどを併用した。学生の発表内容がどのようなものであるのかを示すために、以下にその項目リストをあげた。（数字は人数）

・海の資源	4	・健康問題	牛乳の栄養素	2
・ビールの歴史	2		アロマセラピー	1
・高齢化社会	1		食品添加物	4
・冷凍食品	3		キシリトール	3
・ハイブリッドカー	1	・観光スポット	ロンドン	1
・緑茶	2		イタリア	1
・温泉	1		オーストラリア	1
・アメリカ大リーグ	7		ハワイ	1
・カメラ	1		ニューヨーク	1
・鳩時計	1		熱海	1
・オートバイ	2			

NII-Electronic Library Service

Meisei University

・万年筆	1	未提出	5
・シューズ	1		

学生の発表内容は上記の通りであるが、資料入手先やウェブサイトのURLを必ず明記することになっているので、教師は学生がオリジナルの英文をどのように加筆・編集して各自のポートフォリオに加えたのか、追跡調査が可能である。それらを検討してみると、教育目標であった「英文要旨の把握」（サマリー）については、十分達成できたと思われる。トピックセンテンスを上手に選び、それを編集してサマリーを完成させている。

その後、学生がプレゼンテーションで使用したすべてのファイルを編集して焼き付け、一枚のCD-ROMにして学生たちに手渡した。これで「学生手作りの教科書」の完成である。これを受け取った学生の笑顔は達成感の表れであり、今後の自信につながるはずである。改めて考えれば、特に大学教師によって作られる英文講読用教科書も、文学作品を除けばこのようにして作られるのではないだろうか。通常、学生はそれを年度初めに1500円から2500円で購入し、授業の中で一年かけて読み進めていく。

おわりに

年度終了時に学生へ無記名の授業評価用紙を配布し、これまで実施してきたポートフォリオ作成と「CD-ROM教科書」に対する意見を求めた。その結果についてすべて記述することはできないが、その中でも特に多かった意見を以下に示すことにする。

- 中学・高校の英語の授業では、教師の指導で授業が進行し、構文や単語、文法を覚えることだけだった。この授業では、自分自身を省みる機会が得られた。
- 前期はコンピュータ操作に戸惑ったり、大量の英文を短時間で読むことが苦痛だった。でも、後期になりインターネットによる情報検索も早くなり、英文のサマリーをとらえる要領がわかってきた。
- 社会は動いているんだなと実感した。教科書に比べてウェブ上では動く画像があり楽しい。また、ホームページを作成した人物に質問することもでき、質問に対する返信メールもいただいた。読むことは、コミュニケーションにつながることがわかった。
- 紙の教科書はいらなくなるとゴミ箱に捨てるが、苦労して作ったCD-ROMの教科書は思い出が詰まっているので容易には捨てられない。

上記の他にも数多くあったが、意外にも授業に対する批判的な意見はなかった。ただし、学生がこれまで経験してきた前期試験、後期試験というものが存在しないため、成績はどのようにつけるのかという質問が三名の学生からあった。この学生は出席率が悪く、試験期間の前後だけ登場する学生である。年度初めに学生に伝えた通り、成績は日頃の活動やポートフォリオのファイルを見れば、誰の目にも明らかである。また、教師のホームページにある掲示板や、メーリングリストに投稿された学生からの報告文を読めば、どの学生が立派な仕事をしているのかわかるはずである。教師だけでなく、学生自身が他の学生の採点者となり得る。ポートフォリオ評価は、ペーパーテストをして点数化する必要のない成績評価の一つ

NII-Electronic Library Service

Meisei University

である。

注

1) 渡辺利雄『英語を学ぶ大学生と教える教師に』(研究社 2001 p. 23)
2) http://www.pz.harvard.edu/Default.htm
3) http://www.rewatch.com/media/index.htm

NII-Electronic Library Service